

うれしかつた事

K · K 生

今思ひ出すと大正十二年九月一日の關東大震災の時だつた。

雨上りの其の日父は市役所に出勤して居て家には母と六才の私と弟で晝飯の最中に地鳴りがしてあの悲惨が起つたのだ。すわと母と一所に玄關から飛び出した通りには前の二階屋根の瓦が落ち、あちこちの家から血相を變へた人々が飛び出して來た。私は母にすがつて裏の竹藪の中へ避難した事を憶えてゐる。

少しして火災が起つた。眞黒な煙が全市を包んでメラ／＼と火焔が立ち上つて來た。逃げ惑ふ群が通りを右往左往して海邊へと疾驅する。風呂敷包をかかへた者、行李を背にした者、皆顔色を變へて居た。火は山へ移つた。バチ／＼と物凄い音を立て、紅蓮の焔が天を衝く。私は母にすがつて「父ちゃんは／＼」と泣き乍ら叫んだ。

「もうすぐ歸つて來るよ」と言つた母の顔も不安な泣き出しさうな顔だつた。「お母ちゃん／＼」泣き叫ぶ子供の聲が混雜した騒然たる物音に交つて其處此處に起つた。私は氣狂ひの様に泣きわめいて父母を呼んで居る迷子を見て、一層悲しくなつて母に父を訴へるのだつた。

其の内に火は間近に迫つた。炎々とした黒煙は天を焦し、火焔はさながら地獄の様だつた。父は未だ來ない。火は近い。泣

き叫ぶ子供の聲がする。

私達は又避難所を海岸の原に見出して其處に移つた。單筒、長持、行李、雜多な物が亂雑に積み重なつて居る。其處へも火の粉は落ちて來た。私は又父を呼び叫んだ……。

間もなく父が歸つて來た。私は飛び付いて父にすがつた。父が歸つて來たんだ、父が。其の時の氣持、私は其の時程嬉しかつた時は無かつた。

母も安心したろう。あの震災で父を無くした者も多くあらう。母を失つた者もあらう。私はそれ等の話を聞く毎に當時の事が思ひ出されて目頭の熱くなる程の嬉しさを痛感する。(1)

鳥の聲

原田 鉄 雄

朝の勤めを濟せホット一息ついた私は机に寄掛つてゐた。昨日の疲れもすつかり消えて身体が爽かである。庭の青葉が春の麗暖い光と共に私の目を射る。そして耳に聞えるのは澄切つた小鳥の歌とお喋べりとのコーラスである。

机に寄掛つたまゝ、耳を澄せてその聲をきく。我と我耳に恍惚とした風で鶯が聲を轉がす様に鳴いてゐる。頬白らしい奴がひとり事を言つてゐる。雀の懐やいだ喋り合ひ、四十雀の内細話どれも親しい聲ばかりだ。が……その中にオヤと思つて耳をかた